回顧講演

クロマトログラフィー科学会の20年

千田正昭

20 th Anniversary of the Society for Chromatographic Sciences

Masaaki SENDA

Senda Analytical Technologies Laboratory, LMS Co.,Ltd

Abstract

The history of the Japanese Society for Chromatographic Sciences is summarized.

The beginning may well have gone back to 1950's, when the Amino Acid Study Group was started by Profs. Ando, Tanaka, and Akabori. Later, Prof. Hatano started a study group for liquid chromatography in 1960, the predecessor of the present society founded in 1989. The author, who has been working in the HPLC industry for many years, starting as a Jeol engineer in 1966, and then working with Jasco for over 20 years, and finally with Shimadzu for 4 years, has participated numerous events, activities and development that took place in the field as well as at the Society.

Keywords: Conference of The Society for Chromatographic sciences, Chromatography Symposium, Discussion Group for Liquid Chromatography (The Society for Analytical Chemistry)

1．はじめに

昨年、2009年11月11日～13日ヤクルトホールにおいて第20回クロマトグラフィー科学会議（20周年記念大会）が開催された。第２日目の授賞式の前に回顧講演を行った。その講演を誌上にて再現せよとのご要望があり、僭越ではあるが、日本でのクロマトグラフィー研究会の歴史を振り返り、クロマトグラフィー科学会議の創設前、クロマトグラフィー科学会議の創設から今日に至る経過等についてまとめてみたのでご参考になれば幸いである。筆者がクロマトグラフィー関連の研究会に出席し始めたのは1970年代半ば頃からであり、それ以前の頃の歴史については資料が少なくて諸先生方の記憶に頼る事が多く、誤りがある可能性もあるが、敢えて記載を行った、企業人であるので企業発表や広告についても目を向けた。ご批判を頂ければ幸である。

2．液体クロマトグラフィーに関する研究会の歴史

今更言うまでも無いがクロマトグラフィーはおよそ100年前、1906年にM. Tswett[1]によって始められ名付けられた方法である。また1952年にはA.J. P. Martin[3]によって気相分配の原理に基づいてガスクロマトグラフィーが創案された。一方、アミノ酸分析は、S.Mooreらにより1958年に「イオン交換法によるアミノ酸の系統的自動分析法」[4]が発表され、米国ベックマン社から120－B型アミノ酸分析計が製造・販売された。1959年頃からわが国にも本装置が東京大学や味の素株式会社に輸入・納品されたとの報告がある[5, 6, 8]。

1960年にはS. Moore教授講演会やアミノ酸分析講習会が開催され、タンパク質、ペプチド、アミノ酸の分離分析に関心が持たれた[8, 9]。講演要旨や歴史的な資料が残っていないために事実判断は難しいが、奥山典生先生（都立大名誉教授、現プロテインテクノインス代表取締役、本会の初代会長）のご記憶では、波多野博行先生（京都大学）が主宰された液体クロマトグラフ研究会の創設前、1958年または1959年頃であろうか、赤堀四郎先生（当時大阪大学）、田中正三先生（当時京都大学）、安藤鋭郎先生（当時東京大学理工研）

千田分析技術研究所、㈱エル・エム・エス

図１　八雲クラブと奥山先生

で設立された“アミノ酸分析研究会（仮称）”があったとの事である。奥山典生先生は当時大阪大学の成田耕造教授から加入・参加を勧められたとの事（2009年３月27日、４月24日、渋谷の八雲クラブにおける奥山名誉教授との面談より）（図１）。

本件を確認するため当時京都大学理学部に在籍されていた鴈野重威氏（当時研究生、元日立製作所、本会の第２代会長）、六鹿宗治先生（元京都大学理学部）にお伺いしたが事実関係は不明であった。鴈野先生の記憶では「大変昔のことで、記憶もあいまいであるが、ベックマン社のアミノ酸分析計が輸入されたので、東大安藤研を中心に“アミノ酸分析研究会”をベックマン社とともに発足したと聞いている。その後京都で1960年に液体クロマトグラフ研究会ができ、1962年に第１回自動液体クロマトグラフ研究会がスタートした。1963年または1964年初め頃、波多野先生が米国コーネル大学へご出張中に安藤先生から“アミノ酸分析研究会”を自動液体クロマトグラフ研究会に吸収して欲しいと言われたことがあったと記憶している」との事（鴈野先生からの2009年10月21日のE-mailより抜粋）。

2-1．液体クロマトグラフ研究会（京都）

波多野博行先生の主宰された「液体クロマトグラフ研究会」は1960年に創設された[9]。1962年８月16日に第１回自動液体クロマトグラフ研究会（京大・楽友会館）が開催され、その後は年に２～３回開催されていた[5, 6]。

第１回のプログラムは六鹿宗治先生によると：

１．自動液体クロマトグラフの進歩：
波多野博行（京大理・講師）

２．アミノ酸及びタンパク質のクロマトグラフィー：
関　得一郎（阪大医）

３．自動液体クロマトグラフの設計と試作：
江頭　暁（京大理・院生）

４．KLA-2型日立アミノ酸分析計：
宮内圭治（日立製作所）

５．アミノ酸自動分析法（Ⅰ）：
鴈野重威（当時研究生、後に日立製作所）

６．アミノ酸自動分析法（Ⅱ）：
小澤恭一（当時助手、後に日立製作所）

1963年秋から“自動”が取れて「液体クロマトグラフ研究会」となる。1964年５月の第７回液体クロマトグラフ研究会から毎年１回の開催となった。筆者も1975年頃から何回か出席したが、会場はかんぽーる京都であった。

1994年１月20日～21日に第37回液体クロマトグラフ研究会が最終回として開かれたが、翌1995年１月22日～25日の創立から35周年を祝う研究会としてThe 35 th Anniversary of Research Group on Liquid Chromatography in Japan（パシフィコ横浜）が行われた。これが事実上の第38回液体クロマトグラフ研究会であり、本当の最終回となった。

2-1-1．液体クロマトグラフ研修会（液体クロマトグラフ研究会主催）

六鹿宗治先生のお持ちの資料並びに御記憶では、1963年２月14～16日に“アミノ酸自動分析講習会”が京都大学理学部化学教室で行われた。日立製作所製のKLA-2型アミノ酸分析計２台を用いた実習と講義の会で20数名が参加した。この会は数年間京都で行われ、アミノ酸分析計以外のUVや反応熱検出器（日本電子㈱製）なども含め、各メーカーの協力で実習を行った。最後の２年間（最終は1969年７月）は初台の東京工業試験所で行われた。翌1970年からは京都に戻って依頼講演を中心にした研修会が開催された。この研修会までは製本した講演要旨集がなく、プリントを配布していた。1972年より参加者が増加して製本された“液体クロマトグラフ研修会資料集”を講演要旨として配布した。1973年の第４回から“第○回液体クロマトグラフ研修会講演要旨集”と言うタイトルが定着して、１年１回の夏の研修会として1994年の第25回まで継続した。筆者の何回かの参加記憶では毎回関西セミナーハウスにて１泊２日で行われた。1988年に波多野先生が退官され、1995年に波多野先生が設立された“新解析技術研究会”との共催で“液体クロマトグラフ研究会、新解析技術研究会第１回研修会”として再出発し、1997年の第３回まで開催された。波多野先生が1998年１月25日に亡くなられて液体クロマトグラフ研究会は終了した（図２、図３、図４）。

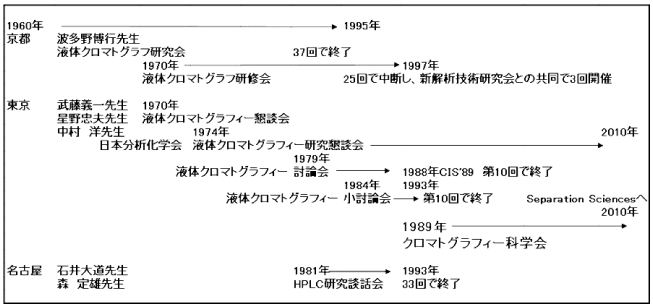

図２　日本のクロマトグラフィー研究会の流れ・概観

図３　1986年日本分光LC 800シリーズに集まった研究者の皆さん

図４　波多野博行先生退官記念シンポジウム1988年（比叡山ホテル）

アミノ酸分析計開発の“前夜”の様子について少し述べる。1951年S. MooreとH. Steinによるイオン交換樹脂カラムを用いたアミノ酸の定量分析法が発表され[2]、1958年に前出のD. H. Spackman、W. H. Stein、S. Mooreによるアミノ酸分析計の自動化に成功し[4]、ベックマン社から市販された。日本では、その頃、京都大学理学部化学教室では田中正三先生（生物化学）の研究室でアミノ酸自動分析計の国産による開発に興味を持つグループが波多野博行先生（当時講師、放射線化学講座、後に分析化学講座担当）を中心として集まり、上記研究会を発足させた。当時のメンバーは小澤恭一氏（当時助手、後に日立製作所）、鴈野重威氏（当時研究生、後に日立製作所）及び江頭　暁氏（当時研究生、後に愛媛大学）であった。文部省科学研究費で日立製作所と共同で、1959年自動分画方式の万能型自動液体クロマトグラフ（KLF−1型）を試作した。1962年には日立製作所からアミノ酸自動分析装置KLA−2型が市販され、これに伴い上記の研究会及び研修会が発足した。実習を伴う講習会は分析化学会近畿支部でも“機器分析講習会”としてアミノ酸分析が行われていた。当時は日立製作所以外にも柳本製作所、柴田化学、三田村技研がアミノ酸分析計を発売して講習会にも参加していた[5, 6]。少し遅れて日本電子が1963年には反応熱検出器を使用した汎用液体クロマトグラフを発売し、1968年には全自動アミノ酸分析計JLC−5 AHを発売した[7]。（2009年10月15日の六鹿宗治先生からのE−Mailを参考に記載した。）

2−2．東京での液体クロマトグラフィー懇談会

これは後の日本分析化学会の液体クロマトグラフィー研究懇談会である。

2−2−1．液体クロマトグラフィー懇談会（東京）

妹尾節哉氏（当時三共㈱、後にサンド薬品㈱）の記述[10, 11, 12]によると「1970年の２月、京都大学・理学部、波多野博行教授の主宰される“液体クロマトグラフ研究会”のあと、春の学会シーズンを迎える頃から胎動が始まった。東京近郊に在職し、液体クロマトグラフィーの実務に関与している有志の間で、イオン交換クロマトグラフィー、アミノ酸分析に加えて、新しい液体クロマトグラフィーの動向を探り、実験上のKnow−How交換や問題解決に関する話し合いの場を作ろうということになり、奥山典生先生を中心に日製産業の白須英雄氏、日立製作所の鴈野重威氏らの協力を得て、1970年４月17日以降数回にわたる準備会の後“液体クロマトグラフィー懇談会”を発足させることになった。石渡昭男氏（味の素）の記述によると、「味の素の分析課長太田氏と日製産業の白須氏の働きかけで、液体クロマトグラフィー懇談会が発足した[12]」とある。さらに液体クロマトグラフィーの応用分野の研究者・実務者の中より、それぞれ異なる分野の代表として、奥山典生（都立大・理）、石渡昭男（味の素・中研）、本間輝武（日本合成ゴム・中研）、妹尾節哉（三共・生技研）、高井信治（東大・生研）、星野忠夫（慶応大・医）の６名が世話役となって会の運営に当り、メーカーの方々には、懇談会の場でご協力を頂くことにしたとある。

液体クロマトグラフィー懇談会の発足１年間の例会行事は、妹尾氏の記録によると下記の通りである。

第１回懇談会：1970年７月10日㈮14時～　農林年金会館
講演：“ゲルパーミエーションクロマトグラフィー”
日本合成ゴム・中研　本間輝武氏

第２回懇談会：1970年９月11日㈮14時～　厚生年金会館
講演：“タンパク質のクロマトグラフィー”
都立大・理　奥山典生氏

第３回懇談会：1970年11月13日㈮14時～
味の素・川崎工場

講演：“デュポン820液体クロマトグラフとその応用”
利康商事　富岡寛治氏
講演：“チャートの異常と原因について”
味の素・中研　石渡昭男氏
第 4 回懇談会：1971年 1 月29日㈮14時～
慶応病院コンファレンスルーム
講演：“試薬の純度について”
和光純薬　山西氏
講演：“体液中の遊離アミノ酸の液体クロマトグラフィー”　慶応大・医　星野忠夫氏
第 5 回懇談会：1971年 3 月19日㈮14時～
慶応病院コンファレンスルーム
講演：“カラム充填剤について”
東大・生研　高井信治氏
三共・生産技術研　妹尾節哉氏
第 6 回懇談会：1971年 5 月21日㈮14時～　三共・品川工場
講演：“カウンターカレントクロマトグラフィー”
三共・生産技術研　高萩英邦氏

その後参加者は次第に増加し、会場の持ち回り開催が次第に困難となり高井信治先生のお世話で東大生産技術研究所（生研）の会議室を定期的に使用するようになった[10]。会長役として武藤義一教授（当時東大・生研）に御願いし、1973年、武藤先生の退官後は山辺武郎教授（東大・生研)、1976年春、山辺先生の退官後は早野茂夫教授（東大・生研）に引き続き依頼した[10]。液体クロマトグラフィー懇談会の第 7 回（1971年 7 月）から第26回（1974年11月）までの詳細記録は存在してない[10, 11, 13]。

2-2-2　液体クロマトグラフィー研究懇談会への移行

液体クロマトグラフィー懇談会の活動の進展に対応して、1974年 7 月16日付けで会の名称を「液体クロマトグラフィー研究懇談会」と改め、㈳日本分析化学会傘下の研究懇談会として理事会の正式承認を得た。

その後液体クロマトグラフィー研究懇談会として1975年 1 月17日の第27回例会（東大・生研）から1979年 7 月17日の第43回（東大・生研）まで順調に発展した。研究懇談会例会の参加者の増加と、液体クロマトグラフィーの応用分野の発展拡大に伴い、現状からの脱皮が世話役の間で話題となり、一つの試みとして年一回の討論会の開催が企画された。第 1 回液体クロマトグラフィー討論会は液体クロマトグラフィー研究懇談会の第44回例会を兼ねて、1979年 9 月20日に東大・生研で行われた。テーマは“HPLCにおける電気化学検出器の応用に関する討論会”で好評であった。年々発展する液体クロマトグラフィー研究懇談会に対して、㈳日本分析化学会からもその傘下の研究懇談会の一つとして、事務局を分析化学会に移し、正式の会とするよう提案があった。この年から、名実ともに日本分析化学会・液体クロマトグラフィー研究懇談会として登録して、運営、活動を続けることになった。ここで、液体クロマトグラフィー研究懇談会規約が作成され、運営委員長として東大名誉教授・埼玉工大副学長の武藤義一先生を委嘱し、これまでの世話役 6 名の他に、瀬田和夫氏（大正製薬・研究所）及び高萩英邦氏（三共・生産技術研）が加わり、会の企画・運営を行うことになった[10, 11]。

第 2 回の液体クロマトグラフィー討論会（第52回研究懇談会を兼ねる）は1981年11月24～26日に虎ノ門の葵会館で各学会との共催・協賛の形式で登録者385名を集めた。以後毎年10月下旬を会期として実施され、年々盛況の度を加えて行った。

2-2-2-1. 液体クロマトグラフィー討論会

液体クロマトグラフィー討論会は上記のようにスタートして、恒例の行事となり、以下並びに表 1 に示すが第10回記念大会をもって終了しクロマトグラフィー科学会へと移行する。

表 1　液体クロマトグラフィー討論会の歴史

西暦	回数	会場	参加者数
1979年	第 1 回液体クロマトグラフィー討論会	東大・生産研	
1981年	第 2 回液体クロマトグラフィー討論会	葵会館	385名
1982年	第 3 回液体クロマトグラフィー討論会	慶応大・医学部	475名
1983年	第 4 回液体クロマトグラフィー討論会	星薬科大学	618名
1984年	第 5 回液体クロマトグラフィー討論会	社会文化会館	
1985年	第 6 回液体クロマトグラフィー討論会	ヤクルトホール	580名
1986年	第 7 回液体クロマトグラフィー討論会	ヤクルトホール	551名
1987年	第 8 回液体クロマトグラフィー討論会	ヤクルトホール	719名
1988年	第 9 回液体クロマトグラフィー討論会	ヤクルトホール	684名
1989年	第10回液体クロマトグラフィー討論会	日本都市センター	745名
	第10回記念国際大会CIS’98		

参考　1）HPLC昭和一桁もの申す　中村　洋　CHROMATOGRAPHY　第 8 回液体クロマトグラフィー春季討論会　講演要旨集　May, 1991より
2）妹尾節哉、星野忠夫、寺部　茂、津田孝雄他　液体クロマトグラフィー研究懇談会第100回例会記念誌　㈳日本分析化学会液体クロマトグラフィー研究懇談会　1999

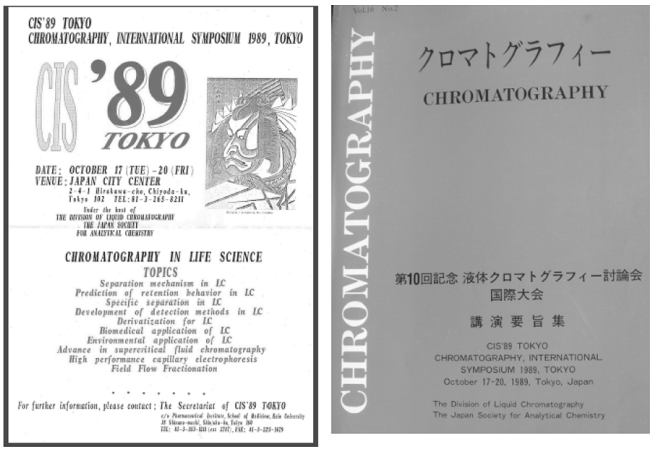

図５　第10回記念大会CIS '89の案内と講演要旨集

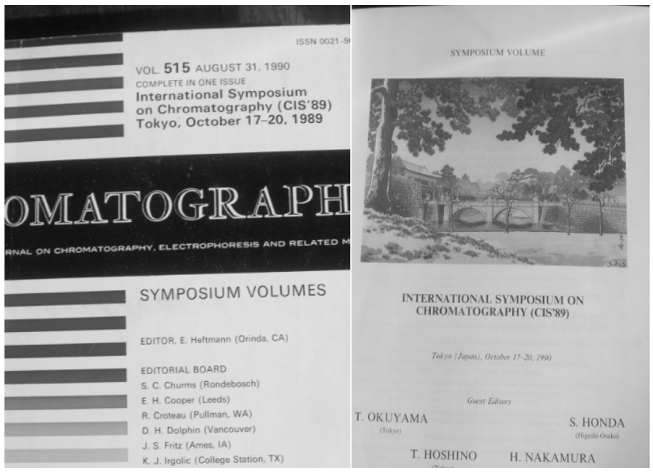

図６　第10回記念大会CIS '89 J. of Chromatography Symposium Volumes

第１回は1979年９月20日東大・生研、第２回は1981年11月24～26日葵会館、第３回は1982年10月20～22日慶応大・医、第４回は1983年11月９～11日星薬科大、第５回は1984年10月29～31日社会文化会館大ホールでそれぞれ開催された。この第５回の討論会から、実行委員として寺部　茂先生（姫路工大)、本田　進先生（近畿大薬)、津田孝雄先生（名工大）が加わられた。第６回（1985年10月29～31日）から新橋のヤクルトホールで行われるようになった。交通の便も良く、参加者も毎回500名を超え、時には700名近くの参加者があった。この回から実行委員に森　定雄先生（三重大）が加わった[19]。第７回（1986年10月28～30日)、第８回（1987年10月27～29日)、第９回（1988年10月25～27日）の後、第10回（1989年10月17～20日）は、始めて日本で行うクロマトグラフイーの国際学会であるCIS '89 TOKYOを兼ね“液体クロマトグラフィー討論会国際大会”として、日本都市センターで開かれた。

この第10回記念大会は、奥山典生実行委員長、星野忠夫事務局長を先頭に、実行委員会のメンバーが中心となり会員が協力して、企画、準備を進め各関連学会の協賛も得て、討論、ポスター、展示、アトラクションも組み込んだ文字通り記念すべき国際大会となった。参加者も約80名の外国人研究者を含む750名の参加があり盛大なものとなった[14, 15]（図５、図６、図７）。

図７　CIS '89の思い出、学会バッグとハッピ

2-2-2-2. 液体クロマトグラフィー小討論会（第６回より春季討論会）

討論会や例会への参加者の増大を受け、小回りのきく運営で、東京以外でも、討論主題を絞った、発表討論の場を設けようとの趣旨で春の時期にも行うことになった。名称は液体クロマトグラフィー小討論会としたが、後には春季討論会として以下のように開催された。

第１回液体クロマトグラフィー小討論会：
1984年５月11日、東京都立大学
第２回液体クロマトグラフィー小討論会：
1985年５月10日、大阪科学技術センター
第３回液体クロマトグラフィー小討論会：
1986年４月25日、愛知厚生年金会館
第４回液体クロマトグラフィー小討論会：
1987年５月29日、仙台商工会議所会館
第５回液体クロマトグラフィー小討論会：
1988年５月27日、富山高志会館
第６回液体クロマトグラフィー春季討論会：
1989年５月26日、山梨大学工業会館
第７回液体クロマトグラフィー春季討論会：
1990年５月31日～６月１日、大洗文化センター
第８回液体クロマトグラフィー春季討論会：
1991年５月30日～31日、豊橋市民会館
第９回液体クロマトグラフィー春季討論会：
1992年５月28日～29日、クリエート浜松
第10回液体クロマトグラフィー春季討論会：
1993年５月21～23日、北里大学

この第10回においては、分析化学会主催分離関連研究懇談会連合発表会の名称でそれぞれの研究懇談会の討論会が同時に行われた（表２）。

このように日本分析化学会傘下の液体クロマトグラフィー研究懇談会は年に複数回の例会と討論会、小（春季）討論会を行い、参加者も増大を続けていた。1984年５月11日の第１

表２　日本の液体クロマトグラフィー研究会の歴史、概観

西暦		討論会	会場	小討論会等	会場
1960	S 35	液体クロマトグラフ研究会発足（京都）			
▽					
1969	S 44				
1970	S 45	液体クロマトグラフィー懇談会発足（東京）			
1971	S 46				
1972	S 47				
1973	S 48				
1974	S 49	日本分析化学会　液体クロマドグラフィー研究懇談会発足（武藤義一会長）			
1975	S 50				
1976	S 51				
1977	S 52				
1978	S 53				
1979	S 54				
1980	S 55	第１回LC討論会	東大・生産研		
1981	S 56	第２回LC討論会	葵会館	HPLC研究談話会（名古屋発足　1993年終了）	
1982	S 57	第３回LC討論会	慶応大・医学部		
1983	S 58	第４回LC討論会	星薬科大学		
1984	S 59	第５回LC討論会	社会文化会館	第１回LC小討論会	東京都立大
1985	S 60	第６回LC討論会	ヤクルトホール	第２回LC小討論会	大阪科学技術セ
1986	S 61	第７回LC討論会	ヤクルトホール	第３回LC小討論会	愛知厚生年金会
1987	S 62	第８回LC討論会	ヤクルトホール	第４回LC小討論会	仙台商工会議所
1988	S 63	第９回LC討論会	ヤクルトホール	第５回LC春季討論会	富山・高志会館
1989	S 64／H 1	第10回LC討論会	日本都市センター	第６回LC小討論会	山梨大工業会館
		CIS ’98 TOKYO			
1990	H 2	第１回クロマト科学会議	都市センター	第７回LC春季討論会	大洗文化センター
1991	H 3	第２回クロマト科学会議	日本大学会館	第８回LC春季討論会	豊橋市民文化会館
1992	H 4	第３回クロマト科学会議	都立大講堂	第９回LC春季討論会	クリエート浜松
1993	H 5	第４回クロマト科学会議	ヤクルトホール	研究懇連合発表会	北里大薬、SSへ
1994	H 6	第５回クロマト科学会議	ヤクルトホール	第１回クロマトシンポ	京都工繊大
1995	H 7	第６回クロマト科学会議	ヤクルトホール	第２回クロマトシンポ	名古屋工大
1996	H 8	第７回クロマト科学会議	ヤクルトホール	第３回クロマトシンポ	神奈川歯科大
1997	H 9	第８回クロマト科学会議	ヤクルトホール	第４回クロマトシンポ	仙台・艮陵会館
1998	H10	第９回クロマト科学会議	東大山上会館	第５回クロマトシンポ	武庫川女子大
1999	H11	第10回クロマト科学会議	東大安田講堂	第６回クロマトシンポ	金沢大医記念
2000	H12	第11回クロマト科学会議	京都工繊大	第７回クロマトシンポ	徳島大長井記
2001	H13	第12回クロマト科学会議	京都工繊大	第８回クロマトシンポ	東京都立大
2002	H14	第13回クロマト科学会議	東京都立大	第９回クロマトシンポ	豊橋サイエンス
2003	H15	第14回クロマト科学会議	東京理科大記念	第10回クロマトシンポ	一ツ橋記念講
2004	H16	第15回クロマト科学会議	北里大薬コンベ	第11回クロマトシンポ	京都桂キャンパ
2005	H17	第16回クロマト科学会議	長良川国際会議	第12回クロマトシンポ	九大馬出キャン
2006	H18	第17回クロマト科学会議	宮城県建設産業	第13回クロマトシンポ	共立薬科大
2007	H19	第18回クロマト科学会議	函館市民会館	第14回クロマトシンポ	富山県民共生
2008	H20	第19回クロマト科学会議	京大桂キャンパ	第15回クロマトシンポ	静岡グランシップ
2009	H21	第20回クロマト科学会議	ヤクルトホール	第16回クロマトシンポ	長崎大

注）LC討論会：液体クロマトグラフィー討論会　　クロマト科学会：クロマトグラフィー科学会議
LC小討論会：液体クロマトグラフィー小討論会
LC春季討論会：液体クロマトグラフィー春季討論会
SS : Separetion Sciences　　クロマトシンポ：クロマトグラフィーシンポジウム

回小討論会（第62回例会を兼ねる）が奥山典生先生を実行委員長として東京都立大学で開かれた。これを機に例会会場は会場の広さの都合もあり、東大・生研講堂から東京都立大学に移された。1988年5月27日に第5回液体クロマトグラフィー小討論会が富山市の高志会館で開かれる頃には、事務処理が増大して分析化学会の負担が重くなってきた。諸般の都合で、第5回の小討論会から討論会事務と例会事務を分離する事態となった。討論会事務局を独立させ、例会事務はそのまま分析化学会に委託した。後にクロマトグラフィー科学会が発足することになるが、そのきっかけはこの諸般の都合に大きく関わることになる。1989年にクロマトグラフィー科学会が設立された後も日本分析化学会傘下の液体クロマトグラフィー研究懇談会が母体となって例会と春季討論会を運営していた。翌年星野忠夫先生が委員長に就任され（1990～1992）定例会場を慶応大学医学部に移した[15]。1993年の第10回液体クロマトグラフィー春季討論会は、上述したように日本分析化学会の分離科学関連研究懇談会連合発表会として開催された。連合発表会は翌年よりSeparation Sciences（イオンクロマトグラフィー、液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー、フローインジェクション、電気泳動分析は1996年より加わり2006年に離脱）と改称して今日まで継続している。液体クロマトグラフィー研究懇談会は定例会場を東京理科大学に移し、3代目委員長には中村　洋氏（1992～現在、東京理科大学教授）が就任した。その後1994年12月15日には第100回の記念例会を行った。現在では年7回の定例会、LCテクノプラザ（毎年1月末2日間開催、2010年1月には第16回目となる）、LC-Days（研修会）、特別講演会・見学会など活発に活動を続け2010年10月28日には第234回の定例会を迎える[16]。

2-3．名古屋でのHPLC研究談話会

一方、1981年12月7日には名古屋地区で第1回のHPLC研究談話会が石井大道先生（名大）の主宰で開催され、ほぼ毎年3回ずつ開催されて、1993年1月24日の第33回で終了した。愛知県厚生年金会館で主に開催された。本会ではミクロLCは勿論他の多くの研究発表、特別講演、パネル討論、及

表3　HPLC研究談話会の歩み（石井大道先生の文章を抜粋）

（第31回HPLC研究談話会講演要旨集より抜粋）

1992年1月9日　愛知厚生年金会館

HPLC談話会の歩み

（熊本工業大学）石井大道

昭和56年12月の最初のHPLC研究談話会が開催されてから約10年間が過ぎ，本日は第31回目の本会が開催され，各回のプログラムを，その歩みを眺めるため，ここに収録することにした。多くの研究者やHPLCメーカーの関係者の方々には大変お世話になり，厚くお礼を申し上げたい。

各回の開催日は以下に示すとおりであった。

第1回　1981年12月7日	第2回　1982年4月20日
第3回　1982年7月17日	第4回　1982年12月11日
第5回　1983年4月23日	第6回　1983年8月22・23日
第7回　1983年12月10日	第8回　1984年4月23日
第9回　1984年8月21・22日	第10回　1985年1月9日
第11回　1985年4月23日	第12回　1985年8月27・28日
第13回　1986年1月10日	第14回　1986年4月25日
第15回　1986年8月26・27日	第16回　1987年1月9日
第17回　1987年4月23日	第18回　1987年8月20・21日
第19回　1988年1月8日	第20回　1988年4月19日
第21回　1988年8月30・31日	第22回　1989年1月13日
第23回　1989年4月28日	第24回　1989年8月29・30日
第25回　1990年1月9日	第26回　1990年4月17日
第27回　1990年8月28・29日	第28回　1991年1月7日
第29回　1991年4月11日	第30回　1991年7月30・31日
第31回　1992年1月9日	第32回　1992年8月24・25日
第33回　1993年1月24日（最終回）	

図８　HPLC研究談話会（名古屋）の風景

び実習などが行われ、盛会であったと石井大道先生のコメントが残されている。1981年「ぶんせき」誌12月号には開催に至った経緯が掲載されている。岐阜大学工学部の竹内豊英教授からの資料には石井大道先生、平田義正先生他の懐かしい写真がある（2009年６月６日付けのE−mail、添付資料より）（表３、図８）。

３．クロマトグラフィー科学会の創設

世界の歴史上では、1989年11月９日にベルリンの壁が崩壊した。丁度その頃、日本で初めてのクロマトグラフィーの学会として、発起人130名の設立趣意書のもとに、1988年10月ヤクルトホールにおける議を経て、クロマトグラフィー科学会（THE SOCIETY FOR CHROMATOGRAPHIC SCIENCES）が発足した[18]。1989年５月の世話人会において、評議員、理事、会誌クロマトグラフィー（CHROMATOGRAPHY）誌を年４回発行することなどを決め、組織的な体制を確立した。この時をクロマトグラフィー科学会設立と考える。1989年７月上旬での正会員は312名で学生会員は20名であった。

CHROMATOGRAPHY誌のVol. 11, No. 1 Aug., 1989（クロマトグラフィー科学会発足後の第１号）の巻頭に奥山典生先生の執筆された“クロマトグラフィー科学会の設立と展望”では、「クロマトグラフィーは近年、非常な勢いで発展し、いろいろの領域で利用され、さらに分離・分析の基本的な技術としてその重要さを増している。このような状況下で、この領域の研究の発展・向上あるいは国内、国外の研究者の交流を目的として、また液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー、電気泳動などクロマトグラフィーの全ての分野を総合して、クロマトグラフィー科学会を設立することとした。」と記されている[17]。

液体クロマトグラフィー研究懇談会の討論会や春季討論会は、毎年700名を超える参加者を集め、その参加者の所属学会は、日本分析化学会だけではなく、日本化学会、日本生化学会、日本薬学会、日本農芸化学会、日本臨床化学会、電気泳動学会などさまざまであった。このような巨大な会が日本分析化学会に事務局をおき、討論会、春季討論会の煩雑な事務処理を負わせることには無理があった。また、日本分析化学会内部にも、他の研究懇談会を遥かに超える集客力や資金力に対していかにすべきかとの課題があった。また、クロマトグラファーからはクロマトグラフィーが実用上非常に重要な分析法として普及しているにもかかわらず、分析化学と言う分野では比較的軽視されていると感じていることもクロマトグラフィー科学会の独立に関係があったと言う意見もあった[19, 20]。また、本田　進先生（近畿大薬、第４期会長）は「クロマトグラフィー科学会が発足した一つの理由は、最近の分離科学が大きな広がりを見せ始め、液体クロマトグラフィーと他のクロマトグラフィーに垣根を設ける必要がなくなったことをあげることができる。本会が発足するまでにはいろいろな議論があったが、もっと間口の広い会の誕生を望む声が支配的であり、その名称についてもいくつかの提案があった。“クロマトグラフィー科学会”は富山医科薬科大学の谷村教授（第３期会長）のご提案であったと記憶する。」と記されている[21, 24]。更に、CHROMATOGRAPHY Vol. 11 No. 1 Aug., 1989の“クロマトグラフィー科学会と日本分析化学会研究懇談会との関係”欄には「１．クロマトグラフィー科学会は日本分析化学会の（液体）クロマトグラフィー研究懇談会とは別の組織である。２．従来、日本分析化学会（液体）クロマトグラフィー研究懇談会はそのクロマトグラフィーに関する分析技術者の技術についての年間行事として、年５回の研究懇談会とクロマトグラフィー討論会を行ってきたが、分析化学会の意向としては他の研究懇談会とのバランス上、大きな負担となる討論会の事務をはぶきたいという希望があった。３．そこで、８回、９回、10回討論会関係のみ事務を慶応大学に移転させ、運営を行った。この討論会の運営は将来（できれば11回から）クロマトグラフィー科学会がその重要な行事として運営（春季及び秋季）を引き継ぐことになる予定である。以下省略」という記載がある。第１期の会長は奥山典生先生で、理事には石田泰夫（島津）、石渡昭男（味の素）、今坂藤太郎（九大・工）、奥山典生（都立大・理）、海保　功（昭和電工）、加藤芳男（東ソー）、鴈野重威（日立）、神野清勝（豊橋技科大）、瀬田和夫（横河電

機）、妹尾節哉（三共）、千田正昭（日本分光）、高萩英邦（三共）、竹内　誠（日本電子）、田中信男（京都工繊大）、谷村恿徳（富山医科薬大）、田淵博義（梅谷精機）、津田孝雄（名工大）、寺部　茂（姫路工大）、中川照眞（京大・薬）、中村　淳（資生堂）、中村　茂（昭和電工）、中村　洋（東大・薬）、花井俊彦（ジーエルサイエンス）、星野忠夫（慶大・医）、本田　進（近大・薬）、真鍋　敬（都立大・理）の26名であった。メーカー関係者がそのうち10名を占め、クロマトグラフの発展期を象徴している[18]。

4．クロマトグラフィー科学会の歩み

歴代の役員（会長、副会長、事務局長）及びクロマトグラフィー科学会議（会期、会場、実行委員長）、クロマトグラフィーシンポジウム（会期、会場、実行委員長）、クロマトグラフィー科学会学会賞等各賞受賞者一覧はCHROMATOGRAPHY Vol. 30 No. 3 2009クロマトグラフィー科学会創立20周年記念特集号に記されているので御参照頂きたい。

また、受賞者一覧についてはクロマトグラフィー科学会のホームページにも記載がある。http : //wwwsoc.nii.ac.jp/scs/

1997年には日本学術会議登録団体として公式に認可された[24]。

1997年７月８日～11日に京都工芸繊維大学大学会館にて第10回高性能キヤピラリー電気泳動及び関連マイクロスケール技術国際シンポジウム（HPCE Kyoto）がクロマトグラフィー科学会の共催で開催された。

学会賞は５期1998年に今井一洋会長の時より始まり第１回の受賞講演は1999年の第６回クロマトグラフィーシンポジウムで行われた。その後、学術特別貢献賞の贈呈は翌年の1999年の第10回クロマトグラフィー科学会議より始まった。この10回記念大会より、各受賞講演はクロマトグラフィー科学会議にて授賞式の後に行われるようになった。歴代の理事についての一覧は表４に示した。1998年より理事会を中心にクロマトグラフィー編集委員会のほか、ホームページ編成委員会、褒賞委員会、また2000年より、10周年記念出版委員会、

表４　クロマトグラフィー科学会歴代理事・監事一覧

氏　名	第１期（1990～1991）	第２期（1992～1993）	第３期（1994～1995）	第４期（1996～1997）	第５期（1998～1999）	第６期（2000～2001）	第７期（2002～2003）	第８期（2004～2005）	第９期（2006～2007）	第10期（2008～2009）
奥山典生	会長	理事								
石渡昭男	理事	理事	理事	理事						
妹尾節哉	理事	理事	理事	監事	監事					
鴈野重威	理事	会長	理事	理事						
谷村たけ徳	理事	副会長	会長	理事	理事					
本田　進	理事	副会長	副会長	会長	理事	理事				
桃沢洋三			監事	監事	監事					
星野忠夫	理事	理事		理事	理事					
中川照眞	理事	理事		理事	副会長	会長	監事			
保母敏行	理事	理事	理事	理事	理事		理事			
寺部　茂	理事	理事		理事	理事	副会長	会長	監事		
津田孝雄	理事	理事	理事	理事	理事		理事			
今井一洋				副会長	会長	監事				
瀬田和夫	理事	理事	理事	理事	理事					
高萩英邦	理事		理事	理事						
小林英三郎			理事	理事	理事		理事	理事	監事	
千田正昭	理事	理事			理事	理事				
寺田　清			理事	理事	監事	監事				
礒辺俊明			事務局長	事務局長	事務局長	理事	監事	理事		
田中信男	理事	理事			理事	事務局長	事務局長	理事	副会長	会長
神野清勝	理事	理事			理事	理事	副会長	会長	監事	
石田泰夫	理事	理事								
大津　裕		理事								
加藤芳男	理事	理事								
河崎孝男						理事	理事			
後藤順一					理事	理事		副会長	会長	監事
斎藤紘一	理事	理事								
島田和武						理事	理事	監事		
竹内豊英						理事	理事	事務局長	事務局長	理事
中村　洋	理事	理事				理事	理事		理事	監事
永柳ゆたか					理事	理事				
萩中　淳					理事	理事		理事	理事	副会長
馬場嘉信						理事	理事	理事		
二村典行						理事	理事		理事	理事
田淵博義	理事	理事								
竹内　誠	理事	理事								
中村　茂	理事	理事								
岡本昌彦							理事	理事		
渋川明正							理事			
大塚浩二							理事	理事	理事	事務局長
升島　努							理事	理事	理事	
相山律男								理事	理事	理事
金澤秀子								理事	理事	理事
財津　潔								理事	理事	
本間　浩								理事	理事	
宮部寛志								理事	理事	理事
岡林義人									理事	理事
沓名　裕									理事	
西　博行									理事	理事
豊岡利正										理事
眞野成康										理事
齊戸美弘										理事
浜瀬健司										理事
三上博久										理事

長期計画委員会が新に発足した。2003年からは若手の理事、評議員の中から萩中　淳先生を委員長に将来構想ワーキンググループが発足した。2004年には本会が会員登録を委託していた日本学界事務センターが破産宣告し、被害をこうむったが、最小限の負担で収拾した[26, 27]。

2006年の第13回クロマトグラフィーシンポジウムより、参加者の増加を考え、ワークショップA（実務・応用）及びワークショップB（基礎）が新設された。ワークショップA，ワークショップBは同様に2006年の第17回クロマトグラフィー科学会議でも新設され、今日まで継続されている。

また日本化学連合が発足、2007年6月29日これに加盟した。

名誉会員には歴代、山辺武郎、武藤義一、波多野博行、石井大道、奥山典生、金岡裕一の各先生が推挙され、現在は石井、奥山、金岡の先生方となっている。また、後に設けられた顧問は、現在、後藤順一、津田孝雄、寺部　茂、中川照眞、星野忠夫、保母敏行、本田　進の各先生方である。

4-1．クロマトグラフィー科学会議

第1回は1990年10月23～24日、日本都市センターで奥山典生会長を世話人として開催された。口演29件、ポスター発表45件、合計74件の発表があった。そのうち企業の発表が37件と多い。内容的には充填剤関連15件、キャピラリー電気泳14件、超臨界関係6件等が目に付いた。講演要旨集への広告掲載も19件あった。

第2回は1991年10月29～31日、日本大学会館で桃沢洋三教授のお世話で開催された。全て口頭発表で76件の発表があった。メーカーはじめ企業の発表が47件と非常に多い。カーボンカラム、ハイドロキシアパタイトなどのゲル関連発表19件、キヤピラリー電気泳動関連13件、LC-MS関連で5件等があった。演要旨集への広告は21件あった。

第3回は1992年10月28～30日、東京都立大学大講堂で奥山先生の退官記念国際シンポジウムとして礒辺俊明教授のお世話で開催された。特別講演として、Prof. Stellan Hjerten、Prof. Werner Muller、Prof. Heinrich Rahmann、Dr. Xiao Hua Huangの4名が招待され、口頭講演数30件、ポスター発表30件、合計68件であった。企業の発表はFinnigan Mat. 6件、日本分光5件など41件と多く、内容的には充填剤・カラム関連16件、キヤピラリー電気泳動関連12件、LC-MS関係6件、フラーレン4件等であった。展示各社の記録は無いが多くの企業が機器・カタログ展示をされていた記憶がある。講演要旨集への広告は14社であった。

第4回（1993年10月25～27日）は久々にヤクルトホールで鴈野重威会長のお世話で開催された。ポスター発表は無く、口頭発表のみで61件であった。そのうち、LC-MSの関係でFinnigan Matの発表が5件あり民間企業の発表は30件であった。講演内容は充填剤13件、キヤピラリー電気泳動（以後CE）9件、キラル分析8件、LC-MS 7件であった。また講演要旨集への広告は14件であった。懇親会は資生堂パーラーで行われた。

第5回（1994年11月9～11日）はヤクルトホールで谷村会長のお世話で開催された。口頭発表のみで講演数46件であった。民間企業発表は17件と前年よりは減少した。充填剤10件、キャピラリー電気泳道動8件、キラル分析7件、LC-MS 3件であった。

講演要旨集への広告は11件ではあるが、付設展示は22社に及んだ。

第6回（1995年10月18～20日）も同じくヤクルトホールで開催された。前年と同じく口頭発表のみで講演数は38件で企業発表は16件であった。要旨集への広告は11件であった。特徴として招待講演4件、特別講演2件が含まれていた。

第7回（1996年10月23～25日）もヤクルトホールで本田進会長のお世話で開催された。招待講演4件、特別講演2件を含め講演数は41件で、民間企業の発表は18件であった。講演要旨への広告数は15件であった。

第8回（1997年10月22～24日）もヤクルトホールで本田会長のお世話で開催された。特徴は特別企画として「分離分析法とバリデーション」を設け、その中で6件の招待講演を行った。その他3件の招待講演、一般講演38件を含め講演数は全体で47件であった。そのうち企業発表は16件であった。内容的には例年の充填剤開発に新たにパフュージョンクロマトグラフィー、ロッドカラム、モレキュラーインプリンティングの話題が加わった。要旨集への広告数は12件であった。

第9回（1998年11月19～20日）は、今井一洋会長のお世話で、東大山上会館で開催された。特別講演は次田　皓先生（東京理科大）、森田昌敏先生（国立環境研）の2件、招待講演は6件、一般講演は28件、6年ぶりに復活したポスター発表は30件で全体の講演数は66件であった。企業の発表はエーザイ分析研の5件を筆頭に24件であった。要旨集への広告は14件であった。

第10回（1999年10月21～22日）は今井一洋会長のお世話で、第10回の記念大会として、東大安田講堂（A会場）、山上会館（B会場）の2会場で行われた。本会より前年から始まった学会賞の受賞講演を年会の場で行うことになった。初めての学術特別貢献賞の奥山典生先生、学会賞の津田孝雄先生、奨励賞の小田吉哉氏（エーザイ㈱）の3者の受賞講演があった。特別講演としてProf. P. Schoenmakers, Prof. F. Hillenkamp, Prof. L. A. Colonの3氏と岡田徳弘氏（シスメックス㈱）の4件、招待講演2件、一般講演24件、ポスター発表21件の合計54件の発表があった。企業発表は18件、発表内容で多いものはCE 13件、LC-MS 5件、カラム関連5件であった。要旨集の広告は11件であった。

第11回は2000年10月26～27日の2日間、中川照眞会長のお世話で、京都工芸繊維大学センターホール及び大学会館で開催された。事務局を京都工繊大に移したこともあり初めての東京以外での開催である。受賞講演3件、依頼講演11件、一

般講演21件、ポスター発表38件で全発表数は73件であった。企業発表数は20件で研究機関の発表が多くなってきている。要旨集への広告掲載は12件であった。

第12回（2001年９月10～11日）は京都工繊大センターホール及び大学会館において高性能液相分離国際シンポジウム（HPLC　Kyoto）とジョイントして開催され講演要旨集は１冊にまとめられた。クロマトグラフィー科学会議としては、学術特別貢献賞の本田　進先生（近大・薬）、学会賞の萩中　淳先生（武庫川女子大・薬）、奨励賞の田中喜秀氏（日本ベーリンガーインゲルハイム）３名の受賞講演、３件の特別講演、Prof. L. Karger、Prof. Yoshiyuki Sakaki、Dr. J. Michael Ramsey、依頼講演６件、一般講演14件、ポスター発表27件など合計53件の発表があった。また、パネル討論会「将来の分離機器と分離剤、適用範囲の拡大、必用とされる性能および技術開発戦略」が中村　洋、Fred E. Regnier、田中信男の各氏の座長で行われた。発表内容では一般のカラム関連に加えモノリスカラムの発表が目に付いた。企業発表16件。広告は９件であった。

第13回2002年10月10日～11日は寺部　茂会長の下で、実行委員長、保母敏行先生のお世話で、東京都立大学講堂で開催された。今回から会長とは別に実行委員長が会議のお世話をされるケースが多くなった。実行委員会は相山律男、磯辺俊明、大津　裕、小林英三郎、千田正昭、中釜達朗、星野忠夫（敬称略）の各氏で構成した。

学会最中にノーベル賞委員会からの田中耕一氏（島津製作所）の化学賞受賞の報に驚きの声が上がった。学会賞の島田和武先生（金沢大・薬）、奨励賞の斉戸美弘先生（豊橋技科大）、眞野成康先生（東北大・薬）の３件の受賞講演、各企画テーマに関連する11件の依頼講演、一般講演７件、ポスター発表36件で全講演数は57件であった。話題は分析の信頼性向上、μ–TAS、プロテオミクスーナノLC–MS、モノリスカラム等であった。企業の発表は26件で、そのうち島津の発表が５件あった。講演要旨集への広告は10件であった。

第14回（2003年11月11～12日）は寺部　茂会長の下、実行委員長、中村　洋先生（東京理科大・薬）のお世話で東京理科大学記念講堂・大会議室で開催された。実行委員会は相山律男、伊藤正人、小池茂行、小林英三郎、千田正昭、中釜達朗、二村典行、古野正浩、三輪敏紳（敬称略）で構成した。学会賞の後藤順一先生（東北大・医）、奨励賞の陳　子林氏（当時NTT、現武漢大学）による受賞講演、依頼講演７件、一般講演26件、ポスター発表20件で全体で57件の発表であった。また企業発表は17件であった。今回もモノリスを含めたカラム関係12件、CE 13件、μ–TAS ６件、LC–MS ５件の発表があった。講演要旨集への広告は14件であった。

第15回2004年11月11日～12日は神野清勝会長の下、実行委員長、本間　浩先生（北里大・薬）のお世話で北里大学薬学部コンベンションホールで開催された。学術特別貢献賞の大井尚文氏（キラルクロマトグラフィー研究所）、学会賞の竹内豊英先生（岐阜大学・工）、奨励賞の田岡万悟先生（東京都立大・理）、高柳俊夫先生（岡山大・自然）の受賞講演４件、プロテオーム、メタボローム等のテーマに関する依頼講演７件、一般講演20件、ポスター発表28件で全体で59件の発表数であった。発表内容ではカラム15件、モノリス６件、CE ９件、LC–MS及びμ–TASがそれぞれ４件であった。企業発表は14件であった。講演要旨集への広告は10件であった（図９）。

図９　第15回クロマトグラフィー科学会議（2003）北里大学薬学部（竹内豊英先生よりご提供頂く）

第16回は2005年11月７～８日に神野清勝会長の下、実行委員長竹内豊英先生のお世話で長良川国際会議場で開催された。第４回日中分離科学合同セミナーとのジョイント開催であった。学会賞の中島憲一郎先生（長崎大・薬）、奨励賞の多賀　淳先生（近大・薬）及び角田　誠先生（東大・薬）の受賞講演３件、各分野からの依頼講演10件、一般講演12件、ポスター発表24件、全体で発表数は49件であった。発表内容では昨年の話題にHILICカラムやモレキュラーインプリンティング（以後MIP）が加わった。企業発表12件であった。講演要旨集への広告は多数の製薬会社の協力で89件であった。

第17回（2006年11月１～２日）は後藤順一会長のお世話で宮城県建設産業会館で開催された。この回から前日午後にワークショップB（基礎技術）が開催され、会期中にはワークショップAが開催されるようになった。ワークショップBは「LC–TOFMSを徹底的に使おう」で岡林義人理事の座長で６件の発表と眞野成康理事の司会で「ここまでできるLC–TOFMS」のパネルディスカッションがあった。ワークショップA（実務の話題）は相山律男理事が座長で、テーマ「試験室のシステム査察とFDAを含む国内外の動向」に対して２件の講演、それにパネルディスカッション「査察成功の秘訣（過去の事例に学ぶ）」が行われた。受賞講演は学会賞の大塚浩二先生（京大院・工）、奨励賞の後藤貴章先生（東北大院・薬）及び北川文彦先生（京大院・工）の13件、依頼講演３件、一般講演26件、技術セミナー（ESA Biosciences）１件、

ポスター発表32件で全発表数は71件であった。また、内容的にはモノリスを含めたカラム関係16件、LC–MS 14件、CE 6件が目に付いた。企業発表はワークショップを含め27件であった。講演要旨集への広告は39件と前年に次いで製薬企業の協力で多かった。

第18回（2007年11月8～9日）は後藤順一会長の下、実行委員長板橋　豊先生（北大院・水産）のお世話で函館市民会館で開催された。ワークショップBはテーマ「ナノの世界を覗いてみよう」は前日11月7日の午後に座長、岡林義人理事のもと5件のメーカー発表があった。また石濱　泰先生（慶応大先端生命研）の司会でパネルディスカッション「ナノLCの限界と可能性」があった。ワークショップAはテーマ「特定保健用食品の位置づけと品質評価」で相山律男理事が座長で3件の講演があった。受賞講演は学会賞の財津　潔先生（九大院・薬）、奨励賞の久保拓也先生（東北大院・環境）及び槍田　孝先生（産総研計測標準）の3件、依頼講演は2件、一般講演24件、ポスター発表35件で全体では72件の発表があった。内容的には、モノリス、HILIC,MIPなどを含め15件、LC–MS 11件、CE 6件であった。企業発表はワークショップBを含め36件と久しぶりに多かった。講演要旨集への広告は7件であった。ランチオンセミナーが1件（ワイエムシー）あった。

第19回（2008年12月1～2日）は田中信男会長の下、実行委員長大塚浩二先生の御世話で京都大学（桂キャンパス）船井哲良記念講堂で開催された。HPLC 2008 Kyotoとのジョイント開催であり例年とは異なっている。受賞講演は学会賞の金澤秀子先生（慶応大・薬）の1件のみであった。ワークショップ（食）は宮野　博理事が座長で2件の講演が行われた。またワークショップ（薬）では梅田和弘理事及び岡林義人理事が座長でそれぞれ1件ずつの講演があった。HPLC 2008 Kyotoのオープニングをかねて Plenary　Lectureが3件あった。一般講演9件、ポスター発表は29件で全体の発表数は46件、企業発表は10件、広告は11件であった。

第20回（2009年11月11～13日）は田中信男会長の下、実行委員長中村　洋先生の御世話で昔を懐かしんで、東京新橋のヤクルトホールにて第20回記念大会が開催された。恒例の受賞講演は学会賞の宮部寛志先生（富山大院・理工）、奨励賞の加藤くみ子先生（国立衛研・薬品部）及び鱸木堅一郎先生（福岡大・薬）の3件、学生講演12件、一般講演7件、教育講演として、ESA社のPaul　H.　GamacheとMerckSeQuant社のEiner　Pontenの2氏による外国人による講演があった。記念大会であるので、2日目以降は特別講演として、日立製作所の神原秀紀氏、島津製作所の田中耕一氏、展望講演として北野　大氏、記念講演として後藤順一、神野清勝、寺部　茂、大塚浩二、鈴木茂生、竹内豊英、萩中　淳、升島　努の各先生の8件、それに新領域開拓講演として浜瀬健司先生（九大院・薬）及び黒岩貴芳先生（産総研）の2件、田中信男会長の会長講演、筆者が回顧講演をおこなった。講演総数は39件であった[30]。20周年を記念して学会賞とは別に以下の各賞の授与があった[36]。

図10　㈱ヤクルト本社、寺田清氏への運営貢献賞の贈呈

図11　㈱島津製作所安藤分析計測事業部長への特別企業貢献賞の贈呈

学術貢献賞：礒辺俊明氏（首都大学東京）
運営貢献賞：寺田　清氏（㈱ヤクルト本社）（図10）
特別企業貢献賞：株式会社島津製作所（図11）
企業貢献賞：株式会社日立ハイテクノロジーズ、株式会社住化分析センター、ダイセル化学工業株式会社、株式会社資生堂、ナカライテスク株式会社、ジーエルサイエンス株式会社、財団法人化学物質評価研究機構、日本分光株式会社、株式会社ワイエムシー、東ソー株式会社、株式会社クロマニックテクノロジーズ、メルク株式会社、株式会社エル・エム・エス、西尾工業株式会社

実行委員会は、中村　洋委員長の下、委員として、竹内豊英（岐阜大院・工）、金澤秀子（慶応大・薬）、相山律男（ヤ

表５　クロマトグラフィー科学会議の歴史

回	会場	実行委員長	会期	実行委員会、発表
第１回	日本都市センター	奥山典生	1990,10月23日～24日	29（ポスター45）
第２回	日本大学会館	糀沢洋三	1991,10月29日～31日	76
第３回	東京都立大学大講堂	礒辺俊明	1992,10月28日～30日	30（ポスター30）
	奥山典生教授退官記念国際シンポジウム			
第４回	ヤクルトホール	鴈野重威	1993,10月25日～27日	口頭のみ61
第５回	ヤクルトホール	谷村恿徳	1994,11月９日～11日	口頭のみ61
第６回	ヤクルトホール	谷村恿徳	1995,10月18日～20日	口頭のみ38
第７回	ヤクルトホール	本田　進	1996,10月23日～25日	口頭のみ41
第８回	ヤクルトホール	本田　進	1997,10月22日～24日	口頭のみ47
第９回	東京大学山上会館	今井一洋	1998,11月19日～20日	28（ポスター30）
第10回	東大安田講堂、山上会館 記念大会、受賞講演始まる	今井一洋 受賞講演	1999,10月21日～22日 奥山、津田、小田	24（ポスター21）
第11回	京都工芸繊維大センターH	中川照眞 受賞講演	2000,10月26日～27日 神野、中山、三田村	21（ポスター38）
第12回	京都工芸繊維大センターH HPLC Kyoto	田中信男 受賞講演	2001,9月10日～11日 本田、萩中、田中(喜)	26（ポスター27）
第13回	東京都立大講堂	保母敏行 受賞講演	2002,10月10日～11日 島田、斉戸、真野	実行委員会 21（ポスター36）
第14回	東京理科大学記念講堂他	中村　洋 受賞講演	2003,11月11日～12日 後藤順一、陳　子林	実行委員会 37（ポスター20）
第15回	北里大学薬学部コンベンシ	本間　浩 受賞講演	2004,11月11日～12日 竹内(豊)、田岡、高柳	31（ポスター28） 21（ポスター38）
第16回	長良川国際会議場	竹内豊英 受賞講演	2005,11月７日～８日 中島、多賀、角田(誠)	25（ポスター24）
第17回	宮城県建設産業会館 ワークショップB（10月31日）	後藤順一 受賞講演	2006,10月30日～11月２日 後藤(順)、後藤(貴)、北川(文)	39（ポスター32）
第18回	函館市民会館 ワークショップB（11月７日）	板橋　豊 受賞講演	2007,11月８日～９日 財津、久保、槍田	37（ポスター35）
第19回	京都大学（桂キャンパス）	大塚浩二 受賞講演	2008,12月１日～２日 金澤秀子	17（ポスター29）
第20回	ヤクルトホール 第20回記念大会	中村　洋 受賞講演	2009,11月11日～13日 宮部、加藤(く)、轟木	実行委員会 口頭のみ39

M. Senda 2010, 10.30

クルト本社)、中沢真子（ヤクルト本社)、伊藤佳子（慶応大・薬)、西尾　忠（慶応大・薬)、及び千田正昭で構成された（写真３：実行委員)。講演要旨集への広告は14件であった。付設展示企業は13社、ランチオンセミナーは３社であった[30](表５)。

4-2. クロマトグライーシンポジウム

第１回（1994年６月27～28日）は実行委員長田中信男先生（京都工繊大）の御世話で京都工繊大センターホールで開催された。シンポジウムのテーマは「最新の分離メディアと応用」で、依頼講演６件、一般講演23件、総数は29件、そのうち企業発表は12件で、付設展示27社、講演要旨集への広告は12件であった。

第２回（1995年６月29～30日）は実行委員長津田孝雄先生（名工大）の御世話で名古屋市今池ガスホールにて開催。シンポジウムテーマは「分離モードの選択と新しい分離場の提案」で、CE ９件、GC ４件、キラル６件などと主題講演、依頼講演を含め45件の発表があり、企業発表は18件、インターネット・ホームページの実演展示があった。講演要旨集への広告は12件であった。

第３回（1996年４月25～26日）は実行委員長奥山典生先生（神奈川歯科大）の御世話で神奈川歯科大学講堂にて開催。シンポジウムテーマは「21世紀に向けての挑戦：ミクロ化から宇宙へ」と言う壮大なテーマであった。ミクロ・キヤピラリーカラム７件、LC-MS ５件など34件の発表があり、企業発表は15件で、講演要旨集への広告は16件であった。

第４回（1997年６月２～３日）は実行委員長後藤順一先生（東北大院・薬）の御世話で東北大学の艮陵会館で開催。シンポジウムテーマは「分子認識と補足の高精度化」で、29件の発表のうち、CE ５件、LC-MS ５件、企業発表５件、講演要旨への広告は11件であった。

第５回（1998年８月４～５日）は実行委員長萩中　淳先生（武庫川女子大・薬）の御世話で武庫川女子大学薬学部にて開催。シンポジウムテーマは「分離と検出の高機能化」で、２会場で特別講演３件を含め57件の発表があった。CE 13件、LC-MS ６件、企業発表18件で、講演要旨集への広告は12件であった。

第６回（1999年６月25～26日）は実行委員長島田和武先生（金沢大・薬）の御世話で金沢大学医学部記念館にて開催。シンポジウムテーマは「効率的前処理法の開発と応用」で、初めての学会賞に田中信男先生（京都工繊大）と奨励賞の竹田さほり先生（大阪工技研）の受賞講演が本シンポジウムで行われた。次回の受賞講演からクロマトグラフィー科学会議において授賞式の後行われることになる。受賞講演２件、特別講演３件を含め46件の発表があり、企業発表は８件であった。内容的にはイオンクロマトグラフィー、環境分析、プロテオームやCE ７件、MS ４件、各種前処理法など多岐にわたっている。講演要旨集への広告は12件であった。

第７回（2000年６月１～２日）は実行委員長馬場嘉信先生（徳島大・薬）の御世話で徳島大学長井記念ホールで開催。シンポジウムテーマは「21世紀へ向けた分離・検出科学の新展開」で、μ-TAS関連の２件の特別講演およびミクロ化のセッションで６件、CE ８件、CE-MS、LC-MS、GC-MS関連で６件など40件の発表があり、企業発表は８件で、要旨集への広告は10件であった。閉会後に徳島大ゲノム機能研究センターの見学会があった。

第８回（2001年５月17～18日）は実行委員長礒辺俊明先生（都立大・理）の御世話で都立大国際交流会館にて開催。実行委員会は、小林英三郎、千田正昭、高橋信弘、市村　徹の各氏で構成された。シンポジウムテーマは「21世紀の分離検出科学と機能ゲノミクス」で、新しい分離媒体とミクロ化技術及びプロテオミクス及び機能ゲノミクス関連のセッションと講演が多数を占め、ポスター発表16件を含め発表数47件、企業発表は７件で、講演要旨集への広告は８件であった。

第９回（2002年６月13～14日）は実行委員長神野清勝先生（豊橋技科大）のお世話で豊橋サイエンスコアにて開催。シンポジウムテーマは「21世紀の分離科学とは？」、４件のシンポジウムセッションでの24件の口頭発表と33件のポスター発表、さらにランチオンセミナー１件、企業のワークショップ５件と新趣向で合計63件の発表があった。内容的にはCE 14件、前処理７件、ミクロ技術、モノリス、MIP、チタニア等ゲルの開発などで、企業発表は15件であった。講演要旨集への広告は製薬企業から77件の協力があった。

第10回（2003年８月２～３日）は実行委員長升島努先生（広島大院・医歯薬）の御世話で東京一橋記念講堂で開催。シンポジウムテーマは「分離法と質量分析」で、ミクロ、ナノ分離とMSの話題が多く、新しい質量分析法の発表もあった。パネルディスカッション「分離・質量分析をめぐる世界最新の動き」ではCE、マイクロチップ、MS、プロテオミクス、グライコミクスが話題となり、徹底討論「分離法、質量分析、ここが問題、その解決法」では予め参加者からの質問がメーカー等に提出され、討論が行われた。発表数23、パネル討論１件で企業発表は８件であった。日本薬学会主催のバイオメディカル分析化学シンポジウムとの関連もあり２日目は半日で終了。講演要旨集への広告は10件であった。

第11回（2004年５月20～21日）は実行委員長大塚浩二先生（京大院・工）の御世話で京都大学桂キヤンパスにて開催。今まで続いたシンポジウムテーマは設けず、セッションⅠ「新しい分離場の創出」、セッションⅡ「微細空間における分離科学」、セッションⅢ「クロマトグラフィーにおけるマイクロ・ナノテクノロジー」、特別企画のセッションⅣは「新しい分離場の創出：MEKCの開発とその後のCEの発展」と題して、寺部　茂会長のACS Award in Chromatography受賞記念講演が化学とマイクロ・ナノシステム研究会特別セッションで行われた。ポスター発表17件を含め41件の発表、うち企業発表は11件であった。セッションのタイトルにあるようにCEとマイクロチップCEで９件、μ-TAS ４件、モノリス他分離媒体８件の発表があり、講演要旨集への広告は12件であった。

第12回（2005年５月19～20日）は実行委員長財津潔先生（九大院・薬）の御世話で九州大学病院地区コラボステーションⅠにて開催。セッションごとに「生体・食品・医薬品関連分析」、「環境分析」、「最先端分析技術」等のタイトルで口頭発表21件、依頼講演など７件、ポスター発表29件、全体で58件、うち企業発表は13件、内容はモノリスなどゲルの関連が８件、CE関連11件などで、講演要旨への広告は10件であった。

第13回（2006年６月８～９日）は実行委員長金澤秀子先生（共立薬大）の御世話で、共立薬科大学で開催。この回から、前日のワークショップB「初心者のための液体クロマトグラフ法基礎講座」で座長を相山律男理事、会期中のワークショップA「医薬品開発における技術移転を考える」は座長を西　博行理事が勤められた。一般講演19件、ポスター発表24件、依頼講演６件、ワークショップ講演５件、技術セミナー（㈱MCM，コロナCAD）１件、ランチオンセミナー３件、合計58件で、うち企業発表は14件、講演要旨集への広告７件、付設展示16件であった（図12）。

第14回（2007年５月10～11日）は実行委員長宮部寛志先生（富山大院・理工）の御世話で富山県民共生センターサンフォルテとやま自遊館にて開催。前日のワークショップB「分離技術基礎講座（医薬品分析における分離分析技術）」（座長は西博行理事と宮野博理事）で５件の講演があり、会

図12　第13回クロマトグラフィーシンポジウム、開催案内ポスター

図13　ヤクルト株式会社様の飲み物サービス

期中のワークショップA「今後のジェネリック医薬品のあるべき姿」（座長は相山律男理事と岡林義人理事）では2件の講演と「これからのジェネリック医薬品」のテーマでパネル討論が行われた。一般講演21件、ポスター22件、技術セミナー2件、ランチオンセミナー3件、全体で55件うち企業発表は16件、付設展示は15件、講演要旨集への広告は8件であった。

第15回（2008年5月30～31日）は実行委員長豊岡利正先生（静岡県立大・薬）の御世話でグランシップ（静岡）にて開催。前日のワークショップB「クロマトグラフィーの基礎を深く知りたい方へ」（座長、岡林義人理事、宮野　博理事）では、理論、カラム、MSの講演3件があった。会期中のワークショップA「私たちの身の回りを守る環境分析」（座長、相山律男、西　博行両理事）では、3件の講演があった。依頼講演3、一般講演22、ポスター31、ワークショップ6、技術セミナー1、ランチオンセミナー2件、全体で65件であった。うちLC–MS関係の発表が10件、モノリスキヤピラリーカラム3件等、企業発表は17件で、付設展示13件、講演要旨への広告9件であった（図13）。

第16回（2009年5月29～30日）は実行委員長中島憲一郎先生（長崎大院・医歯薬）の御世話で長崎大学中部講堂で開催。前日のワークショップB「より良いクロマトグラムを得る秘策」（座長は宮野　博理事、岡林義人理事）では、超純水の使用方法、LC–MSのコンタミ、キヤリーオーバー低減等について専門家の講演3件があった。会期中のワークショップA「夢のクロマトグラフィーを語る夕べ」では田中信男、本多　隆、立木秀尚、千田正昭、伊藤正人、早川禎宏、山上　仰、矢澤　到、長江徳和の各氏が壇上でパネルディスカッションを行った。依頼講演3、一般講演21、ポスター26、技術セミナー2、WA 3で合計55件の発表であった。豚インフルエンザ禍の折から心配していたが多くの参加があった。企業発表12件、付設展示7件、講演要旨集への広告は10件であった[31]（表6、表7、表8）。

4–3．CHROMATOGRAPHY（クロマトグラフィー）誌

第1巻（Vol. 11 No. 1）は　1989年8月10日に発行された。最初の5年間は随筆“窓”欄に多くの方から98件ものクロマトグラフィーに関する種々の話題・人生経験が投稿された。また、クロマトグラフィー関連雑誌のタイトルサービス、その他会告等の記載があった。またVol. 12 No. 3 1991より国際図書番号ISSN 0917–3048を取得した。さらにVol.13よりChemical Abstractに収録されることとなった。Vol. 15より、“窓”欄を廃止して、正論文、技術論文中心となる。Vol. 17より常任編集委員会（委員長、副委員長、顧問、幹事）設置。Vol. 19よりCHROMATOGRAPHY誌の名称がCHROMATOGRAPHY Journal of Separation and Detection Sciencesに変更される。Vol. 22 No. 2 2001より、日中合同分離科学シンポジウムが行われ、本誌と「色譜」誌（Chinese Journal of Chromatography）との間で論文の相互掲載が行われるようになった。

Vol. 23 No. 1 2002より寺部恭介氏のデザインによるSCS学会ロゴマークがCHROMATOGRAPHY誌表紙に記載された。第1巻からの発行巻数：94巻（2009年末まで）、年4～6冊発行（最初の2年間は2冊、最近は要旨集含め5冊）。論文発表内容は、原著論文83件、総説108件（うち受賞論文22件）、エッセイ103件技術レポート37件となっている。歴代編集委員長は、津田孝雄、高萩英邦、小林英三郎、萩中　淳、竹内豊英、大塚浩二、金澤秀子及び宮部寛志の諸先生方で、特集号の企画や原稿集めのご苦労・ご努力に感謝する（図14）。

4–4．国際交流事業

表6　クロマトグラフィーシンポジウムの歴史

回	会場	会期	実行委員会	展示他	発表数（P）
第1回	京都工芸繊維大	1994,6月27日～28日	田中信男	展示27社	29（0）
テーマ	最新の分離メディアと応用				
第2回	今池ガスホール	1995,6月29日～30日	津田孝雄		45（0）
テーマ	分離モードの選択と新しい分離場の提案				
第3回	神奈川歯科大学講堂	1996,4月25日～26日	奥山典生		34（0）
テーマ	21世紀に向けての朝鮮：ミクロから宇宙へ				
第4回	東北大学艮陵会館	1997,6月2日～3日	後藤順一		29（0）
テーマ	分子認識と補捉の高精密化				
第5回	武庫川女子大学薬	1998,8月4日～5日	萩中　淳	A、B 2会場	57（0）
テーマ	分離と検出の高機能化				
第6回	金沢大学医学部	1999,6月25日～26日	島田和武		46（0）
テーマ	効率的前処理法の開発と応用　受賞講演：学会賞　田中信男　　奨励賞　竹田さほり				
第7回	徳島大学長井記念H	2000,6月1日～2日	馬場嘉信		40（0）
テーマ	20世紀に向けた分離・検出科学の新展開				
第8回	都立大学国際交流会館	2001,5月17日～18日	礒辺俊明	実行委員会	47（16）
テーマ	21世紀の分離検出科学と機能ゲノミクス				
第9回	豊橋サイエンスコア	2002,6月13日～14日	神野清勝	製薬広告76社	63（33）
テーマ	21世紀の分離科学とは？				
第10回	一橋記念講堂	2003,8月2日～3日	升島　努		23（0）
テーマ	分離法と質量分析				
第11回	京都大学桂キャンパス	2004,5月20日～21日	大塚浩二		41（17）
第12回	九州大学馬出キャンパス	2005,5月19日～20日	財津　潔	LS 2	58（29）
第13回	共立薬科大学	2006,6月8日～9日	金澤秀子	展示16社	58（24）
	W.S.B「初心者のためのLC法基礎講座」6月7日			TS 1、LS 3	
	W.S.A「医薬品開発における技術移転を考える」6月8日			WS 5	
第14回	富山県民共生センター	2007,5月10日～11日	宮部寛志	展示15社	55（21）
	W.S.B「医薬品分析における分離分析技術」5月9日			TS 2、LS 3	
	W.S.A「今後のジェネリック医薬品のあるべき姿」5月10日			WS 7	
第15回	グランシップ（静岡）	2008,5月30日～31日	豊岡利正	展示13社	65（31）
	W.S.B「クロマトグラフィーの基礎を深く知りたい方へ」5月29日			TS 1、LS 2	
	W.S.A「私たちの身の回りを守る環境分析」5月30日			WS 6	
第16回	長崎大学中部講堂	2009,5月29日～30日	中島憲一郎	展示7社	55（26）
	W.S.B「より良いクロマトグラムを得る秘策」5月28日			TS 2、LS 1	
	W.S.A「夢のクロマトグラフィーを語る夕べ」5月29日			WS 3	
					745（197）

TS：テクニカルセミナー、LS：ランチオンセミナー、WS：ワークショップ
M. Senda　2009,10月23日

表7　クロマトグラフィー科学会議及びシンポジウム参加者

クロマトグラフィー科学会議

西暦	回	会場	登録者数	内会員数
1999年	第10回	東大安田講堂	152	89
2000年	第11回	京都工芸繊維大	198	122
2001年	第12回	京都工芸繊維大	176	97
2002年	第13回	都立大	156	69
2003年	第14回	東京理科大記念	150	120
2004年	第15回	北里大薬	176	104
2005年	第16回	長良川国際	159	60
2006年	第17回	宮城県建設産	167	63

クロマトグラフィーシンポジウム

西暦	回	会場	登録者数	内会員数
1999年	第 6 回	金沢大医学部	146	69
2000年	第 7 回	徳島大長井記念	162	63
2001年	第 8 回	都立大学国際	205	83
2002年	第 9 回	豊橋サイエンス	148	60
2003年	第10回	一橋記念講堂	150	120
2004年	第11回	京大桂キャンパ	166	56
2005年	第12回	九大馬出キャン	170	69
2006年	第13回	共立薬科大学	198	57

M. Senda　2009年 9 月18日

表8　クロマトグラフィー科学会会員数推移

年度	正会員	学生会員	維持会員	名誉会員	顧問	寄贈	合計
1990年10月	360	6	27	3			396
1991年10月	454	7	40	3			504
1993年 9 月	544	15	44	3			606
1994年12月	516	21	25	4			566
1995年 7 月	487	14	25	4			530
1996年 7 月	516	14	25	4			559
1997年 8 月	506	58	27	4			595
1998年 8 月	576	66	24	4			670
1999年 7 月	582	64	24	4			674
2000年 8 月	584	60	22	4			670
2001年 6 月	567	51	22	3			643
2002年 7 月	553	52	22	3			630
2003年 9 月	547	42	21	3			613
2004年 8 月	542	69	23	3	2		639
2005年10月	452	26	21	3	2		504
2006年10月	407	24	23	3	5	21	483
2007年10月	375	19	24	3	5	20	446
2008年10月	370	17	24	3	6	20	440

Chromatography誌、会議録より抜粋　　2009年 9 月17日　M. Senda

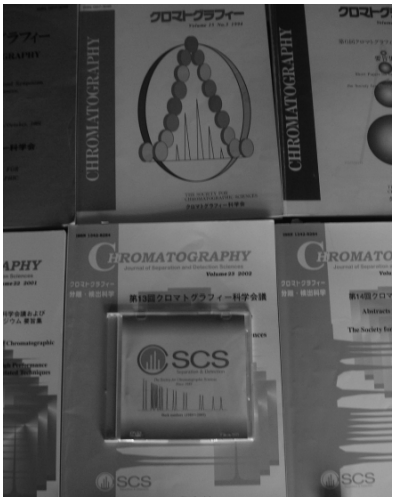

図14　CHROMATOGRAPHY（クロマトグラフィー）誌

4−4−1．1997年より学会内に国際交流講演会補助金の制度を作り外国人講演の援助を開始した。（Vol. 18 No. 11997）

4−4−2．中日分離科学合同セミナー

第 1 回中日分離科学合同セミナー、CJJSSS 2000（First China−Japan Joint Seminar on Separation Sciences）は2000年 7 月26日～29日に中華人民共和国大連市において開催された。中国側代表は、中国科学院大連化学物理研究所Yukui　Zhang教授（中国クロマトグラフィー学会会長）、日本側代表は、京都大学大学院薬学研究科中川照眞教授が勤めた。日本からは11名が参加した[28, 33]。

第 2 回日中分離科学合同セミナー（2nd　JCJSSS）は2001年12月22日～25日にかけてホリディイン京都で開催された。本セミナーは中川照眞教授とYukui　Zhang教授を実行委員長として日本学術振興会の後援ならびに（株）島津製作所および信和化工㈱からの協賛で行われた。中国側の参加者は12名で

図15　第４回日中分離科学合同セミナー（2005）長良川国際会議場

あった[34]。

第３回中日分離科学合同セミナー、CJJSSS 2004（3rd China−Japan Joint Seminar on Separation Sciences）は2004年４月２日～４日に中華人民共和国大連市において開催された。中国側代表は１回、２回同様Yukui　Zhang教授、日本側代表は豊橋技術科学大学神野清勝教授（クロマトグラフィー科学会会長）が勤めた。中国から21名、日本から10名の参加があった[35]。

第４回日中分離科学合同セミナー（4th　JCJSSS）は2005年11月９日～10日にかけて長良川国際会議場で開催された。日本側代表は神野清勝教授、中国側代表はYukui　Zhang教授が勤められた（図15）。

4−4−3．高性能液相分離国際会議シンポジウム

HPLC　Kyoto 2001は2001年９月11日～14日にかけて京都工芸繊維大学センターホール、大学会館において開催された。世界で始めてのサテライトシンポジウムで寺部　茂教授と田中信男教授が実行委員長を勤められた。

HPLC　Kyoto 2008は2008年12月２日～５日にかけて京都大学（桂キャンパス）船井哲良記念講堂において開催された。実行委員長として田中信男教授と大塚浩二教授が勤められた。本シンポジウムは例年、米国、ヨーロッパで交互に開催されており、米国、ヨーロッパ以外の地域で行われた初めての正規のシンポジウムである[32]。

その他多くの国際学会との相互連携、会員の参加が行われた。

５．国際学会での受賞者

海外での著名なクロマトグラフィー関連の賞を授与された日本の先生方を紹介する。これらの賞は、世界の著名なクロマトグラフィー研究者が受賞されている、心よりお祝いしたい。今後も更に若手の研究者の受賞を期待したい。

The A. J. P. Martin Award：寺部　茂（1995年）

The M. S. Tswett Chromatoguraphy Award：波多野博行、池川信夫（1982年）；原　昭二、宮崎　浩（1986年）；石井大道（1987年）；奥山典生（1988年）

The M. J. E. Golay Award：石井大道（1990年）；神野清勝、寺部　茂（1999年）；津田孝雄（2005年）；田中信男（2007年）

The Silver Jubilee Award：田中信男（2002年）

National Awards in Chromtography of American Chemical Society：寺部　茂（2004年）；田中信男（2009年）

（これら受賞の資料は寺部茂名誉教授よりコピーを頂いた“Chromatography : a Century of Discovery 1900−2000 : a Bridge to the Science/Technology ” Eds. C. W. Gehrke, R. L. Wixom and E. Bayer, 2001 Elsevier, Amsterdam. Chapter 2 : The Builders of Chromatography– Major Chromatography Awards and the Award Winners Leslie S. Ettreを参考にした）

その他の受賞（CHROMATOGRAPHY誌に記載されたもの）

2004年９月　EuroanalysisVIII H. E. メルク賞：
馬場嘉信教授（現名大院・工）
サマランカ（スペイン）

2005年６月　HPLC 2005　ベストポスター賞（第１位）：
金澤秀子教授（慶応大院・薬）
ストックホルム（スウェーデン）

2005年６月　HPLC 2005　ベストポスター賞（第３位）：
鈴村禎崇氏（当時　京大院・工）
ストックホルム（スウェーデン）

2006年６月　HPLC 2006　ベストポスター賞（第１位）：
堀江勘太氏（当時　京都工芸繊維大）
サンフランシスコ（USA）

（2009年11月時点までの資料による）

６．謝辞

第20回クロマトグラフィー科学会議（第20周年記念大会）2009年11月12日の記念式典での回顧講演を行う栄誉を与えて頂きました、中村　洋実行委員長はじめ実行委員の皆様に感謝致します（図16）。また本講演を行うにあたり、多くの先生方にお伺いしたり、メールで御願いして資料を頂いたり、昔の記憶を語って頂きました。ここにその御氏名を記し感謝致します。奥山典生先生、磯辺俊明先生、寺部　茂先生、鴈野重威先生、六鹿宗治先生、星野忠夫先生、岡橋美貴子先生、田中信男先生、津田孝雄先生、竹内豊英先生、大塚浩二先生、宮部寛志先生、また中村　洋先生、妹尾節哉先生、本田　進先生、谷村恿徳先生他多くの先生方の記述された随筆、論文等を引用させて頂いた。

また、多くの会員の皆様方に感謝致します。

図16　第20回記念クロマトグラフィー科学会議実行委員
前列左より、千田正昭、中村　洋実行委員長、金澤秀子、中沢真子
後列左より、西尾　忠、伊藤佳子、竹内豊英、相山律男の各氏（敬称略）

7．終わりに

回顧講演の内容をCHROMATOGRAPHY誌にとのご要望があり、宮部　寛志編集委員長からは、講演内容を簡単にまとめればとの助言があった。しかし、パワーポイントの講演内容は画面を眺めてその場でのアドリブで済ませて、面白おかしく話ができたが、文章にまとめるとなると、いい加減では済まされない厳密さを要求されるので、大役を引き受けたことを後悔した。なかなか原稿がまとまらず、資料の見直し、読み直しに時間を費やした、また今年の夏の暑さにも負けて集中ができず閉口した。8月脱稿のところ原稿提出が大変遅れましたことをご容赦願いたい。全体的に冗長で、網羅的ではあるが重要な記述を書き落としているのではないかと懸念される。最後に企業人として企業の参画を見てみると、クロマトグラフィー科学会議、クロマトグラフィーシンポジウム全体を通じて、企業発表の多い企業は島津製作所58件、資生堂46件、日立ハイテクノロジーズ45件、日本分光30件、ジーエルサイエンス23件の順であった。また広告総数の多い企業は日立ハイテクノロジーズ80件、ダイセル化学71件、住化分析センター64件、ナカライテスク52件、化学物質評価研究機構48件、島津製作所44件と続いている。付設展示については部分的な記録しか残っていないために集計は行わなかった。学会創設時と比較して、企業の発表が減少し、CHROMATOGRAPHY誌への広告の数も大幅に減少している。経済状況を反映しているものと思うが、企業が活発な活動をしている時期が参加者も多い。再度の活性化を期待したい。

文献

[1] M. Tswett, Ber. Dtsch, Bot, Ges., 24, 316−323 (1906)

[2] S. Moore, W. H. Stein J. Biol. Chem.192, 663 (1951)

[3] A. T. James, A. J. P. Martin, Biochem. J., 50, 679−690, 52, 238−242 (1952)

[4] D. H. Spackman, W. H. Stein, S. Moore, Anal. Chem.30, 1190 (1958)

[5] 鴈野重威　アミノ酸分析―あれやこれや　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 33−38 (1999)

[6] 鴈野重威　“10年一昔”巻頭言　CHROMATOGRAPHY Vol. 12, No. 2, P 4−6 (1991)

[7] 千田正昭　LPLC～HPLCへ　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 126−134 (1999)

[8] 石渡昭男　アミノ酸自動分析の思い出　窓　CHROMATOGRAPHY Vol. 12, No. 1 (1991)

[9] 波多野博行　化学解析におけるクロマトグラフィーの役割　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 20−27 (1999)

[10] 妹尾節哉　−液体クロマトグラフィー研究懇談会　発足のころ―　窓　CHROMATOGRAPHY Vol. 11, No. 2, P 7, Dec (1989)

[11] 妹尾節哉　液体クロマトグラフィー研究懇談会の歩みを振り返って　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 47−49 (1999)

[12] 石渡昭男　私と液体クロマトグラフィー　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 43 (1999)

[13] 液体クロマトグラフィー研究懇談会記載一覧　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 167−171 (1999)

[14] 岡橋美貴子　液体クロマトグラフィー研究懇談会との関わり　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 44 (1999)

[15] 星野忠夫　クロマトグラフィー研究懇談会随想　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 57−58 (1999)

[16] 中村　洋　液体クロマトグラフィー研究懇談会　ぶんせき　創立50周年記念誌　P 57 (2002)

[17] 奥山典生　クロマトグラフィー科学会の設立と展望　CHROMATOGRAPHY Vol. 11, No. 1, P 4, (1989)

[18] 経過、評議員、理事、クロマトグラフィー科学会設立趣意書、クロマトグラフィー科学会会則、クロマトグラフィー科学会と日本分析化学会研究懇談会との関係、他　CHROMATOGRAPHY Vol.11, No.1, (1989)

[19] 寺部　茂　液体クロマトグラフィー討論会実行委員会の思い出　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 83−84 (1999)

[20] 津田孝雄　時と夢　液体クロマトグラフィー研究懇談会　第100回記念誌　P 78−80 (1999)

[21] 本田　進　クロマトグラフィー科学会が目指すもの夢　CHROMATOGRAPHY Vol. 11, No. 3, June (1990)

[22] 本田　進　日本学術会議登録を記念して　CHROMATOGRAPHY Vol. 18, No. 1, 1997

[23] クロマトグラフィー科学会役員、科学会議、シンポジ

ウム、クロマトグラフィー科学会議各賞受賞者一覧 CHROMATOGRAPHY Vol. 30, No. 3 (2009)
[24] 本田　進　クロマトグラフィー科学会設立20周年に思う　学会創立20周年特集　CHROMATOGRAPHY Vol. 30, No. 1 (2009)
[25] 千田正昭　クロマトグラフィー科学会20周年を振り返って　学会創立20周年特集　CHROMATOGRAPHY Vol. 30, No. 1 (2009)
[26] 田中信男　学会創立20周年特集　CHROMATOGRAPHY Vol. 30, No. 1 (2009)
[27] 日本学会事務センター破綻の経過説明と対応に付いて CHROMATOGRAPHY Vol. 25, No. 3, P 122−1123 (2009)
[28] 中川照眞　雑観　学会創立20周年記念特集　CHROMATOGRAPHY Vol. 30, No. 2, P 69 (2009)
[29] 鴈野重威　クロマトグラフィー科学会の思い出　学会創立20周年特集　CHROMATOGRAPHY Vol. 30, No. 3 (2009)
[30] 第 1 回～第20回クロマトグラフィー科学会議講演要旨集
[31] 第 1 回～第16回クロマトグラフィーシンポジウム講演要旨集
[32] 田中信男 「HPLC2008Kyoto」を終えて　talk SHIMADZU LC talk Vol.71 (2009)
[33] 1st CJJSSS 2000報告　CHROMATOGRAPHY Vol. 22, No. 1 (2001)
[34] 2nd JCJSSS 2001報告　CHROMATOGRAPHY Vol. 23, No. 2 (2002)
[35] 3rd CJJSSS 2002報告　CHROMATOGRAPHY Vol. 25, No. 2 (2004)
[36] 中村　洋　第20回クロマトグラフィー科学会議を終えて　talk SHIMADZU LC talk Vol. 75 (2009)
[37] “Chromatography : a Century of Discovery 1900−2000 : a Bridge to the Science/Technology” Eds. C. W. Gehrke, R. L. Wixom and E. Bayer, 2001 Elsevier, Amsterdam. Chapter 2 : The Builders of Chromatography– Major Chromatography Awards and the Award Winners Leslie S. Ettre